

東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2015

「生きる」につなげる大学の知識 ー大切な命と心のスパイスー

第1回 7/7 (火) 13:30~15:00 報告

救急の現場から見る「いのち」

講師 伊藤太一 (本学講師)

於：図書館大セミナー室

◆◆◆◆◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*

第1回の公開講座(受講者26名)では、看護師と救急救命士を長年勤めてこられた伊藤先生の経験談とそこからのメッセージをうかがいました。

救命法の基本は「相手の代わりにやってあげる」ということです。それは、119番通報する、代わりに心臓マッサージをする、人工呼吸をするということです。AEDが2004年に設置されるようになったのは、それがあれば助かったはずの多くの命が喪われたからです。そのときからAEDを使つての救命処置が一般市民に開放されました。命を大切に手渡しし安全なところに置くというのが、私たちの務めです。

10万人に1人の罹患率のALSの患者も「残りの9万9999人の代わりになってくださっている」という視点で考えてみる必要があります。御嶽山の突然の噴火で亡くなった何の落ち度もない60名以上の方も、身をもって火山の危険を教えてくださいと考えることができそうです。北九州市の飲酒運転での一家死亡事故、救命法をまだ習得できない年齢の小学生が、人を殺すことをしてしまった事件、親が不注意で車の周りにいた子どもを引いてしまう事故などから、人々は教訓を学ぶべきと痛感させられました。伊藤先生はトレーラーに跳ねられた子どもに立ち会いました。その子は「ぼく、このまま死んじゃうの?」といいました。残念ながら亡くなりました。また、焚きすぎて熱湯となっていたお風呂に子どもが誤って落ちるといった事件の後、伊藤先生のおうちでは、お風呂に鍵をかけることにしました。死をもって教えてくれたメッセージを私たちは受け止めていく必要があります。すなわち、ニュースに流れる事件事故をよく想像して痛みを感じる事が大切です。その意味で、いのちとは、それを喪った悲しみを共有する人々のものといえるわけです。事故の教訓を学ぶという意味で、ほんとうにカッコいいのは、今ある自分が明日もあるという姿勢と痛感しました。

子どもはその先の人生が豊かな可能性の塊です。ある小学校の先生は受け持ちの5年生の子が抱えている問題(母の死と悲嘆にくれた父の暴力)を知り、声をかけたことでその子が立ち直りました。その子は後に医者となりました。その意味で子どもの命は、特に尊いと実感しました。

【講座の様子】

